

赤い紙に刷られた 萬朝報

萬朝報は1897(明治30)年から赤い紙を使いましたが、理由は2つありました。1つは医学的理由で「白い紙は目に毒だとの説が米国で起こり、近年青年に近視の多いのは、印刷物が純白の紙を用いるからだ」と経世家が薄色の紙を勧めたこと、もう1つは、他紙との競合のうで目立つ色がよからうという理由で、「地方に荷作りして出す東京の諸新聞の中でも萬朝報は比較的多数の紙数を占めているのになかなかそれを信用してくれる人が少ない。赤紙に変えたら町を歩いても、なるほど赤

「萬朝報」は1892(明治25)年11月1日に黒岩涙香が創刊、「簡単・明瞭・痛快」を柱に、数々のキャンペーン報道を展開して読者の人気を集めた新聞です。

い新聞が店先にある、学校にもある、下宿屋にもある、紳士貴顕の家にもある。萬朝報は盛んに出ているとの感が世人に広がり、成功した」と黒岩涙香は述べています。

しかし、1904(明治37)年10月23日の4千号を期に元の白紙に戻します。その理由は、この年3月1日から萬朝報が考案した20世紀式という扁平活字の使用にあつたよう^{へんぺい}で「赤い紙は黒色インキの写りが悪い。当社は先ごろ、活字を縮小したため、印刷をよくしたいと上等のインキを用いたが、その色合いが紙面に出ない。工芸化学士に質したところ、赤い紙に写りをよくするには青インキでなければいけぬ」というので試したところ、色の写りはよいが、他に支障があつてダメだということで白紙に戻したようです。



萬朝報 1898(明治31)年11月28日付

現在「赤新聞」といえば低俗な新聞の代名詞のようにいわれますが、その元は萬朝報が名士の私行摘発、暴露記事を盛んに掲載したため、非難する人びとの間から生まれた言葉なのです。